

日本の持続的な成長と活性化を目指す

誠実を伝える情報紙

2/29 2024

# Earnest

Vol.12 No.2 (S044)



**ワクワクするような新たな価値観** .....

2頁

テーマは「飛躍」、新年賀詞交歓会2024  
[賀詞交歓会(令和6年)]



**西河技術経営塾講師育成研究に取り組む** .....

4頁

技術経営人財育成のハウツーを整理する  
[西河技術経営塾講師養成研究会]



**企業同士が協力的なのは間接互惠が働くから** .....

6頁

[第8回 地方創生研究会]

OPINIONS

## 新しい時代は自分の力で考えて、それを行動していく

一般財団法人アーネスト育成財団 理事長 西河洋一

(本年賀詞交歓会での理事長挨拶から)  
謹んで新年のご挨拶を申し上げます。  
この度の令和6年能登半島地震で被害を受けられた皆様には、心からお見舞いを申し上げます。一日も早い復旧・復興を心よりお祈りいたします。当財団も金沢を拠点としている「一般社団法人地域創生マネジメントいしかわ(稲垣渉代表理事)」が取り組む被災者の復興を支援いたします。皆様からの義援金を募りますので、ご協力をお願いします。  
本日は、ご多忙のところ、アーネスト育成財団の「新年賀詞交歓会2024飛躍」に、多数お集まり頂きありがとうございます。今『地の時代』から、新しい『風の時代』へと変わり始めています。  
『地の時代』では、地球全体で「産業、労働、経済」を中心とした基盤作りをしてお金持ちほど偉いという価値観の社会を生み出しました。  
『風の時代』では、これまでの資本主義・経済活動の基盤作りの時代から、個々の権利や自由を開放する時代へと変わります。ネット社会において、いかに人との関わり合いを作り上げるかが重要な時代となっています。  
世界的な新しい風が吹き始めています。日本だけが新しい風を吹くことを避けてきました。経済的、科学的にも成長することから取り残されて30年以上も経済成長をすることができずに孤立してきました。そんな日本もコロナ禍で、テレワークやオンラインの急速な普及が起きました。生活様式も変わり、多様な働き方ができるようになりました。新しい変化を見るようになると、風の時代を実感できるようになりました。  
これから20年ほどは『地の時代』と『風の時代』という新しい流れがぶつかり合いながら、様々な価値観が生まれ変わっていきます。新しい時代は、一人一人が主役です。自分の力で考えて、それを行動していく。それを繰り返すことでパワーが増し、幸せが舞い込んできます。  
本日の賀詞交歓会の中でも、同じ価値観を持つ仲間を増やし、新たな風の時代の到来を意識して、ポジティブな心でワクワクしながら新たな価値観を見つけてみましょう。財団は新しい風に乗って、新しい時代をつくれる経営リーダーを育成してまいります。

# テーマは「飛躍」、新年賀詞交歓会2024



**ワクワクするような新たな価値観**

新年賀詞交歓会を令和6年1月17日(水)午後6時から、帝国ホテル東京で開催した。財団は11年目を迎えた。今年のテーマは『飛躍』である。

「新しい風に乗って日本を元気にすることができる凄腕の技術経営人財の育成に取り組む」と、今年の意気込みを語り、中締めをした小平和一朗専務理事



「今年の干支は丙の辰。十二支で一番良い年と言われている」と今年への期待を語る鈴見芝浦工業大学理事長

**イノベーションを起こせる人財**  
来賓の芝浦工業大学鈴見健夫理事長は「本学は昨年ベイエリア・オープンイノベーションセンターを作りスタートアップ企業の支援を始めております。アーネスト育成財団と一緒に人財育成に取り組んでいけたらと思う」と財団との協働を語る。



「新しい風に乗って新しい時代をつくれる経営リーダーを育成する」と語る西河理事長

**新しい『風の時代の』到来**  
西河理事長は開会に先立ち「かつての『地の時代』と『風の時代』という新しい流れがぶつかり合いながら、様々な価値観が生まれ変わっていく。仲間を増やし、新たな風の時代の到来を意識して、ポジティブな心でワクワクしながら新たな価値観を見つけよう」と挨拶する。



「文系も理系的な論理的な考え方ができるようになることは大事」と三幣理事長

**西河技術経営学を百五十名が学ぶ**  
千葉敬愛学園の三幣利夫理事長から「学生にとつて、研究者である教員の授業だけでなく実践経験をもった方の講座も大事ではないか。当初は数名の希望者でスタートした寄付講座が、前年度は33名の学生が履修し、6年間で既に累計で百五十名が学んでいる」と千葉敬愛大学の寄付講座の実績の報告後、乾杯の発声があった。



「MOTに必要なのは戦略で、戦術ではない」と児玉東京大学名誉教授・芝浦工業大学名誉教授

**MOT教育の重要性を説く**  
児玉文雄東京大学名誉教授・芝浦工業大学名誉教授から「MOTは技術パラダイムが変化したときに従来の経験が役に立たないから一番役に立つ。オープンAIとか生成AIが出てきて大変な影響がある。うまく使えばうまくいく。MOT(技術経営の教育)を続けていっていただきたい」と語る。



財団では寄付講座で「西河技術経営学」を学生に教えている。

自社の価値を20秒でPR

西河技術経営塾では自社の強みを短時間で顧客やビジネスパートナーに伝える、「エレベーターピッチ」と呼ばれる手法を学ぶ。塾生・塾生OBが登壇し、自社をPR。塾での成果を発揮、どんな価値を提供できるかを伝えた。



代々木2期生エフ・エフ魚春とと屋の女将永井寛子

永井寛子「うちの売りは、おいしいお魚、そして活きのいい女将でございます」。小坂哲平「躍動する現場力というスローガンを掲げてやっております。仕事は絶対に断りません」。原澤史浩「林業、土木と、そして脱炭素で山林を活かせないかと取り組んでいます。山をお持ちの方、せひお声がけください」。稲垣通泰「バンングラディッシュに興味がある方は声をかけて下さい」。相見祥真「障がい者の方が通う作業所を経営しています。障がい者が活躍できる社会を農業を通じて作っていきたくと取り組んでいます」。菅原壮弘「地方創生、WEB3、スマートシティで

何かやりたいことがあったら菅原壮弘を思い出してください」。



代々木3期生あつまる不動産社長の小泉厚子

小泉厚子「女性の一人暮らしは、あつまる不動産、女性の安心安全は、あつまる不動産、女性のため、あつまる不動産へ、ぜひお越しください」。西河進「日本の文化の豊は約千年続いておりませんが、次の千年の豊を創造するというスローガンのもと、時代に合った豊を作っていくというのが我々の使命だと思っております」。土谷裕樹「排煙窓を付ける仕事をしていきます。この身体ですが、身体は軽く、どこでも行きます」。鳥山和浩「お近くのスーパー、ドラッグストアで雪国アグリのコんにヤ



更科枝理(代々木1期:左)、鳥山和浩(沼田2期)、土谷裕樹(沼田2期:右)



司会の松井美樹(代々木3期:左)と倉沢芽久美(沼田4期生:右)

くゼリーを見かけたら、ご協力のほどよろしく願います」。石原秀昭「不動産販売の仲介業を立川でやっています。立川は『西の新宿』と言っています。立川を活性化していきます」。若野貴信「当社は富山県高岡市で明治10年より铸造業を営んでいます。铸件でお困りの方がいらっしゃいましたら何なりとお声がけください」。



左から原岡和生開志専門職大学教授、吉池信一評議員、廣田令子監事、角忠夫むさし野経営塾長(右)

倉沢芽久美「保険の営業を始めて15年経ち、あなたの心の相談役、接客の神様を目指します」。20秒の塾生の自社PRによって新たなビジネス交流が生まれ、人の輪を広げる機会となった。

『夢の世界へ行かないか』

演歌歌手として今年デビュー予定の財団事務局スタッフ、小椋康平が3曲を熱唱し、会場を盛り上げた。オリジナル曲「夢の世界へ行かないか」では、夢を目指す若手経営者達へエールとなった。



小椋康平の歌声に手拍子、声援が飛び交い、会場全体が明るく元気な「飛躍」の空気に包まれた

能登半島地震復興支援

金沢を拠点とする一般社団法人地域創生マネジメントいしかわ(稲垣渉代表理事)が取り組む被災者の復興支援の協力を参加者に呼びかけた。会場で集まった義援金に財団からの義援金を併せて二十六万一千三百十一円を翌日一般社団法人の口座に振り込んだ。

# 西河技術経営塾講師研究に取り組む



誰もが西河技術経営塾の真髄を理解した経営者育成ができる講師になれるようになることを本研究会では目指している。  
左から小坂哲平(小坂建設㈱代表取締役)、長谷川一英(株E&K Associates 代表)、西河洋一(理事長)、小平和一郎(専務理事、座長)。撮影者の松井美樹(事務局員)を含め5名のメンバーで「西河技術経営塾研究会」は構成されている。

## 西河技術経営塾講師養成研究会

### 1. 研究会メンバー

西河 洋一(理事長)、小平 和一郎(座長 専務理事)、  
長谷川 一英(株E&K Associates代表)、小坂 哲平(小坂建設㈱代表取締役)  
松井 美樹(事務局員)

### 2. 期間 2023年12月6日～2024年9月末

### 3. 開催日 (原則) 隔週水曜日 15:00～17:00

## 技術経営人財育成の ハウツーを整理する

令和六年2月14日に西河技術経営塾講師養成研究会の第4回を財団内会議室にて開催した。5名のメンバーで令和五年12月6日(第1回)から活発な議論が行われていた。開催期限の令和六年9月末までに次世代の講師が学ぶことができる知見を西河技術経営塾の学習指導要領および講師養成マニュアル等として整理していく。

### 技術経営人財育成法の形式知化

経営人財を育成する目的の「西河技術経営塾」は永続的でなければならぬ。本研究会では西河技術経営塾の強みを整理し、暗黙知となつて西河技術経営塾での技術経営人財育成のハウツーの形式知化(文字化)に取り組む。

本研究会では、図1に示す6点を論点としている。

### 基本コンセプトの整理と再確認

第一回研究会では西河技術経営塾の基本コンセプト、対象とする塾生、どういった経営者に育てるのかを代々木校10期、沼田校4期までの10年間で培ってきたものを整理して研究会メンバーの共通認識として再確認をした。

その上で第二回、第三回では求められる講師像、塾生の資質や求める行動、講義構成について議論し、多岐にわたる意見が出た。

### 塾生の資質や求める行動

講師像に関し議論した時、塾生の資質や求める行動についての意見が多数でてきた。裏返せば、それを導くのが講師の役目である。「塾生が自分ではできていないと自覚することが大事であるが簡単ではない」「2代目社長が従業員と会話ができるかが成長の大きなポイントである」といったこれまでの経験や踏まえた意見が小平研究員から出た。

どういった塾生が成長するのかとの議論では「素直な人が伸びる」とこれまで表現していたが「一般にこもるのがいけない」という表現のほうにふさわしいと見解で一致した。素直にさせるためには経営学を教える場合も宗教家のように説教ができないといけない。「素

直」とは言っても、マスコミの情報に素直に聞いてしまうのではなく、その本質を見抜けるようになる必要があるとの意見も出た。

### 求められる講師像

求められる講師像の議論では、講義をすることによって講師自身が社会をどうしたいかがあってもよいという意見が長谷川研究員から出された。塾生から学ぶ姿勢が大切との意見が出され共有した。

塾の中でやっているのは塾生に自分の経営課題を明確にさせた上で10年後30年後にどういう会社にしたいかをあぶり出す。今どういったアクションをしなければいけないかに落とし込み、実際にアクションをさせている。その切り口での整理も必要との意見が松井研究員からあつた。

### 講師内容・構成の見直しを実施

沼田校5期(本年3月開校)に向けて、新しい講師が講義できることを目指して講義内容を見直した。「西河洋一の経営哲学」の2章を追加、IT関連の3章を2章に縮小、グローバル関連の2章を1章に統合した。

経営者として成長するために知っておくべき内容について議論が及び見直した。初回にオリエンテーションを実施し提出物の書き方やメール返信のマナーなどの基本について教える。ハラスメントについて「品質管理とコンプライアンス」の章で議論する。広報やPRやメディアとの付き合い方、心構えなどを教育していく。

西河塾長から「社長をやっている時はすごく楽しい。その楽しさや面白味をどう教えるか」「マス



### 本研究会の論点

1. 西河技術経営塾の基本コンセプト  
「西河技術経営塾」は永続的でなければならない  
永続的でなければならない西河技術経営塾とは
2. 本研究会の狙いと当塾の強み  
中小企業の事業承継を担う若手経営者の育成  
西河技術経営塾はどのような人を対象として、  
どのような経営者に育てていくのか
3. 求められる講師像  
経営経験、マネジメント経験があり  
経営学研究に取り組む研究者  
西河技術経営塾の講師はどのような人であるべきか
4. 塾講義の構成と教材  
技術経営学を構成する形式知を学ぶ  
講師が教える講義の章構成や演習、教材はこれでよいのか
5. 代表的な講義の関連資料と講義計画書  
その教材で教えられるためにはどのようなものが必要か
6. 学習指導要領および講師養成マニュアル  
講師をどう育てるか

図1 塾講師養成研究会の論点

コミに情報がコントロールされている。そういうことを一人一人が考える話をしてほしい」との意見が出た。問題を見つけて出す能力も必要で共通課題で議論するケースメソッドに近いことをやってもいいのではとの意見もでた。具体的な方法等は継続検討となった。

『いい時代』について教える  
若い経営者は、いい時代を知らない。中小企業の役割みたいなのを経済学の観点でいうのか社会学の観点でいうのか立ち位置を塾の前半で教えたほうがいい。

西河洋一の経営哲学の章の追加  
議論の中で、西河塾長の経営に対する考え方や姿勢などの発言があり、塾生に教えるべき貴重な内容であることから、次期から追加される「西河洋一の経営哲学」の

章中に追加することとした。  
自分で動く人が多い。社員やステークスホルダーをうまく使うのが経営である。経営は常にいろんな問題が降りかかってきて右か左かを選ぶ。その繰り返し。会社を大きく成長させるときはすごい問題が山積みになってくる。社長として判断して、それを見て。フオーアップしていく。

アイディアを求めてアンテナを張っていることが重要である。会社が良くなると思ったらそれを徹底的にやらせる。ただ権力で人を動かそうとすると、結局後からパワハラと訴えられるから、注意が必要である。

常に反対意見を言う人がいる。気に入らなくても傍に置いて文句を言わせる。それによって刺激される。本当にどうなのかは自分で調べることを怠ってはならない。

次回第5回  
講義の暗黙知の形式知化を議論  
第5回は令和6年3月6日に開催の予定である。暗黙知となつていない部分を洗い出し、講師に求められる姿勢や要件について議論する。田論の成果を沼田校5期に反映。

## 第12期財団評議委員会を明治神宮内で開催 変革の時こそ、中小企業が躍進する好機

第11期事業報告と第12期の事業計画を審議する定例評議委員会を、令和5年12月13日(水)午後6時からフォレストテラス明治神宮・椎の間で開催した。

吉久保信一評議員、志手一哉評議員、渋谷加津美評議員、小坂哲平評議員が出席し、吉久保評議員が議長として互選され、第11期事業報告と決算報告が承認、第12期の事業計画と収支予算書が承認可決された。

中小企業の経営者育成  
昨今の日本は経営陣を含めて硬直化し、未来が描けてない会社を見受ける。企業が生き残るには経営者自らが、大変革の波を引き起こす必要がある。財団では中小企業の経営者に狙いを定めた経営者育成に取り組む。変革の時こそ中小企業が躍進する好機でもあると小平和朗専務理事が報告。



評議委員会開催に先立ち挨拶する西河理事長



評議員会議長に就任した吉久保信一評議員

暗黙知の形式知化への取り組み  
第12期の事業計画で前年度に本格的に取り組むを開始した西河技術経営塾の暗黙知の形式知化に取り組む次世代の講師陣の育成に役立つ教材づくりを行う。時代の変容に対応できる講義内容の見直しと、講座内容の充実に取り組む。令和5年12月から「経営塾講師養成研究会(座長 小平和朗)」を設立が提案され可決された。



右から小平専務理事、廣田監事、小坂評議員

# 企業同士が協力的なのは間接互恵が働くから

## 第8回地方創生研究会



令和5年12月8日、第8回目となる地方創生研究会(座長吉池富士夫)を財団内会議室にて開催した。日本経済大学大学院の森下あや子教授を迎え、『長寿企業の持続戦略―地域密着の洗練された協力戦略―』と題し報告を受けた。

研究会に参加したのは西河洋一理事長、吉池富士夫座長、小平和一朗専務理事、浅野昌宏理事、山中隆俊理事、石井唯行委員、小坂哲平委員、渋谷加津美事務局員。

【講演】講師(森下)今日は地方創生という文脈で長寿企業の持続戦略、地域密着の洗練された協力戦略について話す。最近長寿企業が有名になってきた。

### 日本の長寿企業は5万社で世界一

日本の長寿企業数は世界一と言われている。千年以上続く企業が20社位ある。五百年が百四十七社、百年以上は4万3千社位。小さい企業も入れると5万社位はある。国際比較の場合には色々な条件があり数字は変わるが、百年以上は日本がダントツ1位だ。(図2)

### 東日本震災後の企業・酔仙酒造

酔仙酒造は震災前には陸前高田に本社があった。震災後に大船渡に本社が移る。酔仙酒造は品評会で賞を取るような地域では優秀な酒造会社である。酔仙酒造は「気仙地方」にあった8軒の造り酒屋が1944年に合併し誕生した。

震災で7名の従業員が亡くなり建物と設備も津波で全部なくなつた。震災から1年後に社長にインタビューした。「何とか歴史だけは繋ぎたいという思いで頑張っている」と答える。

地震のときにこの会社を救ったのが岩手県で有名な酒蔵会社の岩手銘醸である。岩手銘醸という老舗の酒蔵が援助を申し出た。

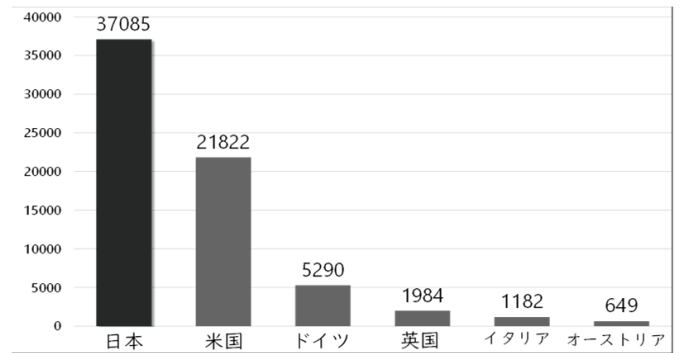


図2 100年以上続く企業 (国際比較)

一つの酒造場所には酒の製造免許が一つしか与えられないので岩手銘醸は一関市千厩(せんまや)にある工場の製造免許を一時的に酔仙酒造に譲り、酔仙酒造がその場所酒づくりを始めた。

岩手銘醸の社長は「これ以上岩手県の製造者数がなくなってしまうたら、切磋琢磨していけなくなる。業界全体が全部駄目になってしまう。1社でも、残そうと考えて」と言った。

海外では「なぜ助けたんだ」という意見が出る。一番がダメになれば自分が一番になれる。しかし酔仙酒造の社長は「自分だけ1人生きていってもあまり良いものにはならない切磋琢磨してこそ」という。

### 8家で創業・キッコーマン

高梨家が1600年代に野田の地で醤油製造を始めた。茂木の6

家と高梨と堀切家の8家が野田醤油(株)を1917年に設立した。

ライバル関係にあった複数の家族が事業に携わると、必ず主導権争いが起こる。能力のない人が経営に携わることだけは避けたいというので、キッコーマンには不文律がある。創業家の8家から入社できるのは1世代に1人。つまり兄弟が2人いても1人しか入社できない。創業家であっても役員になる保証はない。役員になっても社長になれる保証はない。適任者がいれば創業家出身者にこだわらない。従って創業家でない社長もいる。この不文律を今も守っている。こうなると各家は優秀な人材を輩出するために教育に熱心になる。どの家庭も教育に熱心だそう。また、地域のため、銀行、病院、消防、鉄道も水道事業もやっていた。

### 人気の温泉地・城崎温泉

城崎温泉、江戸時代には幕府直轄の天領地。平安の頃から身分の高い人が、この城崎温泉に来た。

城崎温泉は千年以上の歴史を誇る温泉地で「古まん」という旅館が最も古い。20軒ぐらいのファミリービジネス企業が三百年以上わたって営業を続けている。城崎温泉は特にヨーロッパの人



講師の森下あや子教授



(注1) Asia Pacific Family Business Symposium 2023にて“Best Paper Award”を受賞した



城崎温泉 (出典：豊岡市フォトライブラリー)

に人気がある。半径500mの範囲に7つの外湯と77軒の旅館、約40軒の土産物屋や飲食店がある。JR城崎温泉駅があり川沿いに温泉宿が広がっている。「駅が玄関、道は廊下、土産物屋は売店、外湯は大浴場、飲食店が食堂」というスローガンで客を宿の中に囲い込まず小さな商店でも商売が成り立つようにしている。最近まで土産売り場を旅館の中に持たなかった。今でも定価で売り、安売りはしない。歴史的には内湯を作らなかった。この「駅は玄関、道は廊下」という共存共栄の精神がこの町を救ってきた。城崎温泉は、余り源泉が太くないので、温泉を維持するために内湯(客に開放する旅館内の風呂)を禁止し外湯のみとするという共同体のルールを江戸時代から決めていた。明治時代からは湯島財産区という一種の地方自治体をつくり共有財産である温泉を管理してきた。

【質疑応答】座長(吉池) 城崎は身の丈の経営が根付いている。講師(森下) 元気の無い温泉は大規模ホテルの中に土産物屋からレストランから何もかも抱え込んでい。街歩きをしない。城崎温泉は地形的に入れなかった。

(吉池) キックコマンがある野田は田んぼしかない。江戸川と利根川の間の貧しい人たちの集まりの土地。醤油を運河を使って江戸に送った。その出荷量が増えてくる。と従業員が来る。従業員のために水道も病院も必要になる。そこに工業団地を町として作った。講師(森下) 地域のためでなく、会社のためですか。

(吉池) 住んでる人の70%位は従業員ファミリー。

#### 定住が間接互恵成立の要件

(浅野) 間接互恵が成立するためには定住がベースになる。中央アジアは多民族が行き交う。生活環境が過酷な砂漠で定住できない。(森下) 繰り返す、ゲーム理論から来ている。繰り返すと変わる。利他主義が生きる。

(浅野) 海に囲まれている国は安全である。大陸にあつては、攻め込まれて略奪されてしまう。日本の地形的な優位性は大きい。(小平) 日本には企業レベルでの助け合いがある。企業同士で戦っては駄目である。

(西河) 欧米のように競争で企業同士を戦わせたら結局企業は潰れて数が減る。日本人は談合する。談合や付度は悪いと言うが、共に生きるという点で悪くない。調整して過剰な喧嘩をしないから適正価格で売るとなる。地域が広くなると戦う確率が上がる。小さい町

は共生の可能性がある。四万温泉もそうだ。ある程度こぢんまり囲まれた中で皆で巧くやろうという精神を持つと巧くいく。

(西河) 鬼怒川温泉は競争で下げた採算性取れなくなり、借金が返済できなくなり、潰れた。

(森下) 浅野さんの中央アジアの例はおもしろい。協力のモデルで競争と協力をどういう数値にするかシミュレーションしてみる。環境収容力っていうのが、ある負荷の中にどれぐらいの競争する媒体があるか、その濃度を薄くしてやると強いものだけが勝つ。混み合ってくる。と協力するやつが勝つ。希薄だと強いものが勝つ。混み合くと裏切るやつは負ける。談合理論が正しいか

(森下) ヨーロッパで「協力し合います」と発表したたら「談合じゃないか」と言われた。

(西河) 海外で震災が起きるとスパー行つて奪い合う。日本人は自分の家に残っている米があつたら持つていつて皆で分け合う。

(小平) 日本の強みはそこに。戦つて相手を負かすのでなく「あやめてはいけない」「人を駄目にしてはいけない」という倫理観。

(西河) 高い値段を提示し、維持するのがカルテルで、話し合い適正価格で合意してやるのが良い。

(小平) 生き残るために日本人は話し合つて皆でやる文化がある。

(吉池) 日本のやり方の原点は武士道とか礼節を重んじる心とかが今にも繋がっている。日本人には、はしたないの風潮がある。

(小平) 桃太郎の中で、我々も色々な種族を助け、それぞれの力量を持った人を集めて行動するとい

うリーダーシップがある。野田のキックコマンでは8社を戦わせるのではなく一緒にした。飯田グループの6社統合に繋がる。

(西河) 分譲住宅の売上では上位である。飯田グループの業種は建築不動産だから10%もいかない。グループ内で叩き合つても不動産のバリエーションは上らない。

(小平) その競争は、住宅購入者が不利になるだけ。

#### モノづくりでは競争も必要

(西河) (モノづくりの) 住宅建設においては競争も大事である。

(森下) 競争も大事である。だけど競争だけではためである。

(西河) グループ内での競争は残してある。6社で全然競争してないかという競争はしている。

(小平) どこまでカルテルで許されるかは整理できるのでは。

(森下) (海外の学会が) 協力モデルに賞をくれるぐらいだから海外の人も変わってきている。

(西河) でも日本のコンピュータでないが、ある程度同じぐらいの力を持った企業が最低2社程度いないと衰退する。

(森下) 競争は大事である。(西河) 競争しては駄目という話ではない。

(小平) カルテル理論がいけないのは、そういう分野では成長を止めてしまうことだ。

(森下) そうですすね。(西河) 適正競争をするには潰れちゃ駄目だ。潰れてしまうと健全な競争をしなくなる。

(森下) 今の意見を参考に微分方程式を解くといろんな論文が書ける。そうである。

【特別寄稿は、紙面の都合でお休みします】

(注2) 明治大学政治経済学部専任講師・博士(経済学)、(注3) マイケル・リンド著、中野剛志解説、施光恒監訳、寺下滝郎訳、2022『新しい階級闘争—大都市エリートから民主主義を守る』東洋経済新報社

今年の1月、国際政治学者イアン・ブレマーが社長をつとめる調査会社のユーラシア・グループは24年の「世界の10大リスク」のトップに、アメリカの政治的分断「米国の敵は米国」を選んだ。アメリカは分極化と党派対立、政治システムの機能不全を克服することができると見ている。残念ながらその見通しは明るいとはいえない。

連載：アメリカ経済史に学ぶ 第26回 分断国家アメリカの新しい階級闘争 下斗米 秀之

年代から約30年間、大統領、副大統領、国務長官のほとんどをブッシュ家とクリントン家の人物が務めてきた。この間、労働者階級の所得は低迷し、オプショアリングによって欧米の製造業は壊滅的な打撃を受けた。世界金融危機による経済崩壊や複数の悲惨な戦争も経験した。ドナルド・トランプは共和党の予備選でブッシュ家のジェブ・ブッシュを、本選では民主党のヒラリー・クリントンを破って大統領になった。多くの有権者は四半世紀にわたって繰り返されてきたテクノクラート新自由主義の政策サイクルを断ち切りたいと考えたのである。トランプ支持者たちのポピュリズムは、エリート支配に対する当然の反動であったとリンドは主張する。しかし、トランプ的なポピュリズムにも限界はある。ポピュリストのデマゴグは不満の代弁者にはなれず、上流階級が支配する新自由主義に代わる安定的な制度的オルタナティブを作り出すことはできない。ポピュリストが得意なのは、選挙活動であって統治ではないというリンドの言葉は重い。

真の階級平和を実現するには、経済・政治・文化といった社会権力の三つの領域すべてにおいて、大学教育を受けていない大多数の人々に意思決定権を取り戻させる必要がある。現代のアメリカに1970年以前の民主的多元主義を復活させることができるか。分断国家アメリカにおいて、それが途方もない難題であることは言うまでもないが、独占的なエリートから民主主義を取り戻す必要性には強く同意する。

西河技術経営塾講師養成研究会 第1回目の研究会2023年12月6日に財団内会議室で開催した。2月14日の第4回では講義構成の見直し議論をした。

一般財団法人 アーネスト育成財団 案内 塾沼田校第5期開講 3月9日(土) 西河技術経営塾(沼田校)の第5期生の開校式を来賓に星野稔沼田市長を迎えて行う。3名が入塾する予定である。今期からは、沼田市役所のテラス沼田で開講する。

誠実を伝える情報紙 Earnest アーネスト育成財団 活動報告 2024年2月29日 Vol.12 No.2 (S044) Earnest 一般財団法人 アーネスト育成財団 (Earnest Upbringing Foundation) 〒151-0053 東京都渋谷区代々木1-57-2 ドルミ代々木 704号 TEL : 03-6276-6260 FAX : 03-6276-2424 Home page : http://www.eufd.org Facebook : https://www.facebook.com/earnestUFD ■発行人 西河 洋一 ■編集人 小平和一朗

変革に耐えられる経営の研究 日本経済は予測できない社会環境の変化の中にある。財団が取組む技術経営人育成の重要性が増している。変革の嵐に耐えらえる経営とは何かを研究し、その知見をいかに経営者に教えるかが問われている。『風の時代の嵐に耐えられるための準備会合を企画した。委員は西河理事長、吉池富士夫芝浦工業大学理事、森下あや子日本経済大学教授、小平専務理事の4名で、森下が座長に就任する。

編集後記 新年賀詞交歓会で中締めを担当した。「本日は新年賀詞交歓会にお越し頂きありがとうございます。財団専務理事の小平でございます。まだまだ交流の輪は広がっている最中ではございます。が、中締めの時間となりました。わたくし昨年、今までお付き合いが無かった異業種の著名人に沢山お会いすることができました。その交流を通じて新鮮な学びを得ることができました。(本年は)新しい風に乗って、財団は日本を元気にすることができると信じています。技術経営人財の育成に取り組んでまいります。本日参加の皆様のご健康とご多幸、そして能登半島地震で被害を受けられた皆様の一日も早い復旧と復興を心よりお祈り致します。締めさせて頂いた皆さまと一回で締めました。今日の日本を元気にするために、社会の豊かさの源泉を担う、若き経営者が、社員を幸福にする技術経営学を学ぶことが重要である。人財育成の重要性を再認識した。(小平和一朗専務理事)